

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530893

研究課題名(和文) ロールシャッハ法における被検者の主観的反応評価を用いたアセスメント技法の開発

研究課題名(英文) The role of the subjective evaluations on the Rorschach

研究代表者

伊藤 宗親 (ITO, MUNECHIKA)

岐阜大学・総合情報メディアセンター・准教授

研究者番号：10282310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：ロールシャッハ法において、新たな指標を導入し、精神病圏と非精神病圏とを鑑別する方法の検討を行った。新たな指標には、被検者自らが自身の反応を評価する主観的反応評価が用いられ、この指標と旧来の指標との組み合わせや新たな指標の鑑別における価値が検討された。

結果、各指標の中でも、Xu% (対象を曖昧に知覚する割合) だけが精神病/非精神病を鑑別し得るという結果が得られ、新指標の直接的な鑑別上の価値は見いだせなかった。しかしながら、精神病群においてのみ、新指標とXu%との間に有意な負の相関が認められた。このことは、精神病/非精神病を鑑別する指標として、さらなる検討を行う価値があると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The Rorschach as a clinical assessment tool is useful for the differential diagnosis. We tried to test discriminating between psychotics and non-psychotics by using a new Rorschach index, which was asked the subjective evaluation (on the preference or liking) for each of patient's own responses by ten-point scales.

The results, testing the combination of the Rorschach indices including a new one, was that only Xu% (percentage of perceiving vaguely) contributed to distinguish between psychotics and non-psychotics. So, the new index had no differential value. However, only the new index was significantly negatively correlated to Xu% in psychotics. These findings were discussed on the further research.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ロールシャッハ法 主観的反応評価 精神病

1. 研究開始当初の背景

Rorschach 法と他の自己評価式質問紙法を用いた研究は数多く散見され、その有用性も認められている。しかし、bipolar 型障害とボーダーライン・パーソナリティ障害との鑑別に代表されるように、co-morbidity を扱った Rorschach 法における実証的研究は皆無である(事例研究を除く)。

Rorschach 指標の多くは、主として精神病か非精神病かの鑑別診断を行う指標として考案され、逸脱言語表現(Watkins & Stauffacher, 1952)やロールシャッハ分裂病得点(片口・田頭・高柳, 1958)、特殊指標(Exner, 1986, 1993, 2003)などがその代表例となろう。これらが一定の成果を示してきたのは事実であるが、上述したような co-morbidity の問題や病態の時代的变化などを考慮すると、必ずしも各指標が有効性を示すとは限らない。特に、重篤なパーソナリティ障害などは精神病との鑑別に困難を来す場合が多いと思われる。他方で、重篤なパーソナリティの問題と精神病との鑑別に関しては、その重要性がますます増してきている。

ところで、こうした従来の指標は、その多くが客観的な指標であるが、日常的に経験する Rorschach 実践において、Rorschach 反応の質とそれらに対する被検者の主観的な評価は必ずしも一致しないとの印象を得てきた。特にその不一致が病態水準によって異なるとの印象を有している。また、申請者は、統合失調症の Rorschach 研究から、被検者の反応生成プロセスにおける主観的体験の重要性を指摘した(2008)。

このような背景から、従来鑑別診断に用いられてきた指標に、被検者の主観的評価を加え、新たな指標作成の必要性が示された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、Rorschach 法を用いて精神病と重篤なパーソナリティ障害とを鑑別する際、その精度向上に資する技法の開発にある。Rorschach の客観的各指標に加えて、被検者の反応に対する主観的評価を指標として新たに導入し、それらを数量化することによって、数量的に判別可能な尺度の作成を意図している。

本研究の特徴は、精神科的問題を抱えた被検者の内的体験という質的データを数量化すること、主 - 客双方の側面から鑑別診断に有用な現実検討力の査定を可能とすること、診断に際して近年増加している co-morbidity の問題への解決を促し、より精度の高い診断・査定に貢献し得る可能性を有している。

Rorschach 法は、パーソナリティのアセスメントに有用な検査である。しかしながら、この 10 年、co-morbidity の問題が提起しているように鑑別困難な事例が増加している。このような状況に対応するため、反応に対する被検者の主観的評価を用いた新たなアセスメント技法を開発することを目的とする(特に、精神病と重篤なパーソナリティ障害との鑑別力の向上)。

3. 研究の方法

(1)主観的評価データの有効性の確認

日常臨床から得られる Rorschach データを収集する際、通常の手続きに加えて各反応に対する主観的評価データを同時に収集し、精神病ならびに非精神病のそれぞれについて、従来の客観的指標と主観的反応評価データについて、統計解析を行いその有効性が検討された。

(2)鑑別指標の作成

上述の解析と同時に、判別分析等により、診断名ならびに主観的反応評価データを変数に含めた、疾患リスクを予測し得る変数を同定した。また、併せて、各指標間の相関係数を算出した。

被検者(研究協力者) :

精神病患者 19 名(平均 43.9 歳)

[統合失調症などが含まれる]

非精神病患者 21 名(平均 26.7 歳)

[パーソナリティ障害などが含まれる]

手続き :

Rorschach 法の実施手続きは、片口法によって実施された。具体的には、1)自由反応段階、2)質疑段階、3)限界吟味段階からなっており、これらに沿って実施された。被検者の主観的反応評価は、3)の限界吟味段階にて収集することにより、通常の手続きを変更することなく、日常臨床業務の範囲で収集することが可能であった。この主観的評価は、10 件法によって自身の反応についてその好み(好き嫌い)が評価された。

また、得られた反応はすべて Exner 法に準拠したスコアリングに変換された。

実施者である研究協力者(臨床心理士)は、本研究を真の目的を知らされぬまま、データを収集することにより、実施者のバイアスは除外された。なお、得られたデータは、通常使用される指標とともに反応ごとに整理、分類された。

以上の特徴を踏まえ、精神病群・非精神病群の間で、各種指標に関する分析が行われた。

研究体制 :

本研究課題は、申請者が実践ならびに研究の場としている単科の精神病院にて行われた。研究協力者も当該施設所属職員であり、研究遂行上必要な以下の点は保証されていた。

1) データの収集はすべて研究協力者が

行い、データの分析は研究代表者によって行われた。2) 医師の協力により、被検者の診断確定には複数の医師の診断にて評価された。3) 検査実施者(研究協力者)の Rorschach scoring の精度については、研究代表者との協議の上で決定され、その質が担保された。

4 . 研究成果

(1) Xu% の判別力

現実検討力と関連が深い X+%, Xu%, X-%, 特殊指標レベル 1 ならびにレベル 2, 平凡反応、そして主観的反応評価(以下、SE%) について検討を行った。なお、X が含まれる指標は、+, u, - という順で反応の質が悪くなっていることを示すものであり、それらの各指標は全反応に対するそれらの割合を示している。また、特殊指標は主に思考障害を示すものであり、その重篤度によってレベル 1 とレベル 2 にとに分けられており、レベル 2 の方がより重篤なものである。平凡反応とは、多くの人に見られる反応であり、精神病理学上はその少なさが問題となる指標である。

これらを判別分析によって解析したところ、Xu% のみが精神病と非精神病のグループ分けを正しく行い得るとの知見が得られた(70.7% : F=5.76, p=0.21)。SE% については有意な値が得られなかった。この結果は主たる目的とは異なるものの、重要な知見を提供している。すなわち、複雑な病理を呈する精神病群・非精神病群にあって、従来指摘されている X-% のようなより重篤度を示す指標よりも、Xu% というややマイルドな指標の方が両群の鑑別には有用であるという点である。

このことは、さまざまな指標が両群で明らかな統計的有意差を示さない場合、特に重要な視点を提供するものである。

つまり、正常な知覚ないし病的な知覚に差が認められない場合、その中間である稀な知覚(正常とも病的ともいいがたい)が高い判別力を有していると思われる。

(2)主観的反応評価(SE%)の意義

本研究では、SE%の単独ないし組み合わせによる有意な鑑別指標を認めることはできなかった。しかしながら、各群における指標間の相関係数をもとにそれらの関連性を検討したところ、以下のような結果が得られた。

すなわち、精神病群において、Xu%とSE%との間で有意な負の相関係数が認められた($r = -0.47, p < .05$)。相関係数の値も0.47と高く、これは、主観的反応評価の高低とXu%との関連性が意味のある反比例の関係であることを示している。:稀な反応が増えるほど主観的評価は低くなる(あるはその逆)。このことは、精神病群にあっては、気に入らない反応でさえも産出してしまうという傾向を表しているとも言い換え可能である。一般的には、都合の悪い反応をあえて反応として産出しようとはしない。そこに、精神病群の特徴ならびに鑑別時のポイントが存在していると解釈できよう。

また、非精神病群では、精神病群のような両指標の相関係数は認められず、Xu%とX-%との間、X-%と平凡反応との間にいずれも有意な負の相関係数が認められた($r = -0.60, p < .01, r = -0.43, p < .05$)。これらは一方が他方の影響を受ける指標であり、得られた相関係数は目新しい知見とはいえない。

以上のことから、限定的ではあるが、主観的反応評価の鑑別的価値が一部示された。所期の目的のような、系統的な指標とはなり得なかったが、Xu%やX-%などの関連する指標とともに、主観的反応

評価を検討することは有用であろう。とりわけ、鑑別が困難な事例ほど、こうした指標の相関関係が有益な知見を提供してくれるものと思われる。今後も、被検者属性の変更などを通して、同一テーマについて検討する必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

伊藤宗親・服部信太郎 ロールシャッハ法における主観的反応評価の役割,第21回国際ロールシャッハ学会,2014年7月16日,イスタンブル(トルコ共和国)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 宗親 (ITOU Munechika)
岐阜大学・総合情報メディアセンター・
准教授
研究者番号:10282310

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：